

文学青年の死 佐佐木定綱

大学時代、あまりに授業に出ないので、教授に「君は学校にも来ないでなにをしているんだ」と問われ、「喫茶店で本を読んでます」と答えたら、「文学青年みたいなことを言うねえ。なんだか古いねえ」となんとも言えない表情で言われた。読んでいたのは「ジョジョの奇妙な冒険」というコミックだったが、黙っておいた。

教授によると、昔の大学生は授業に出ないで本を読み、喫茶店や飲み屋で意見をぶつけ合っていたらしい。近代文学や流行りの哲学、岩波文庫を片っ端から読んで、知らないとかバカにされる。四、五十年前は近代文学に登場する「インテリゲンチア」がまだまだ存在していた。

「心の花」三月号で佐佐木頼綱が小紋潤の『蜜の大地』について、「壮年の苦しさ、孤独、美意識、死生観を辿ってゆくと、その軸となっっているのが文学少年のままの純粋さだったのだろう」と言っている。

この特集では小紋潤という人の歌はもちろんだが、人間のおもしろさも強く出ている。永田和宏が「月夜の路上で殴り合っている」と言えば、時田則雄は「さびしそうな横顔」を語る。殴り合いなんで小学校以来見ていない。福島泰樹は「小紋が席をへだてて睥睨する中井に激しく噛み付」き、論争となったエピソードを

紹介する。

その中井英夫へ寺山修司が送った手紙が新しく発見され、「唱歌研究」四月号に掲載された。この手紙により、「わが下宿に北へゆく雁今日見ゆるコキコキと囀り切れば」が落とされ、応募原稿にはない「煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし」という歌へと変わった経緯などが明らかになった。文献的価値は置いておいて、ぼくはその手紙の熱さ、自信などにハッとした。「とにかく一応信頼してみて下さい。当たるクジ。」「とにかく中井さん。「冷たい貴公子」さん。はじめなら片足じゃなく両足つつこんで下さい。僕はオモリではかられるなんていやだ。一生懸命」

藤原龍一郎は「あの歌よ、失くなれ」という稚気にあふれた言葉は現在の感覚では、ちよつと痛い！」と言う。

この「痛さ」。

若い（寺山は十八歳）ということもあるだろうが、このような手紙を今書ける人がいるのかなあとと思う。相手が信頼している人だとしても、だ。

現代は「痛さ」を回避するかが重要である。殴り合いなんてもつてのほか。前述の藤原の言う「痛さ」とは少しニュアンスが違うが、まわりより変な言動が目立つと晒されたりハブられたりするので、「痛い」言動を回避しなければならないのは同じことだ。

ぼくも基本的に「痛さ」を回避しようとして生きているので、「痛さ」をものともせず、自らの信念に従って突き進んでいく、愚直とも言える真っ直ぐさに心惹かれるのだ。また「なんだか古いねえ」と言われるかもしれない。